

 「口腔機能低下症」について理解を深める！ 日本老年歯科医学会東京支部

本年4月に保険導入された「口腔機能低下症」について理解を深めることを目的として、7月16日、東京医科歯科大学において日本老年歯科医学会 東京支部研修会（後援：東京医科歯科大学歯科同窓会）が開かれた。

4人の演者のうち最初に登壇した水口俊介先生（東医歯大教授）は、超高齢社会を背景とした口腔機能低下症のバックグラウンドについて解説。そして、栄養状態の低下した高齢患者に対しては、“欠損補綴（能力改善）”に加えて“栄養指導（知識の獲得）”が重要であると説いた。

次の上田貴之先生（東歯大准教授）は口腔機能低下症をチェックする7つの検査項目について解説したほか、同症は“ただちに害となるこ



講演後は、水口先生の司会進行のもと会場からの多くの質問に答えた。

とはなくても、将来的に問題が発生しうる口腔状態”であり、その直接的なアウトカムは“低栄養”である、という概念を患者に説明できることが大切であると訴えた。

続く古屋純一先生（東医歯大教授）は高齢者の心身特性、とくに脳血管疾患と認知症について解説。久保田一政先生（東医歯大講師）は歯科治療における緊急時の対応としてバイ

タルサインの4つの生命兆候（脈拍・呼吸・血圧・体温）について説明したほか、抗血栓療法や感染性心内膜炎について解説した。

最後に水口先生は、新しい病名となった「口腔機能低下症」には、多くの臨床現場からのデータや症例といったアウトプットと、それらを基にした議論が必要であるとし、参加した臨床医に協力と期待を寄せた。